室生犀星の市井鬼小説

本学教授　仲野良一

犀星は昭和一〇年一月（四六歳）に、前年九月以降に発表した短篇七篇をおさめた「神々のへど」を刊行した。『あにいもうと』『猟人』『チンドン世界』『医王山』『神々のへど』（後に『続あにいもうと』と改題）『神かをんなか』『悪い魂』である。そして翌一一年六月には、「純粋小説全集、第八巻」として『弄獅子』をだした。同題の自伝的長篇と、『市井鬼集』の総題で短篇一〇篇がおさめられている。『悪い魂』『足』『猟人』『破落戸の首』『会社の図』『生霊』『紙幣』『チンドン世界』『哀猿記』『ハト』であり、「神々のへど」のものと重複しているのは、『悪い魂』『猟人』『チンドン世界』の三篇である。いわゆる「市井鬼もの」というのは、これらの傾向の短篇をいうのであり、長篇『弄獅子』『女の図』『人間街』（後に『復讐』と改題）なども、その時期や傾向からそれにふくめるべきであろう。

プロレタリヤ文学や新感覚派の運動などが停滞している時期でもあり、文壇の一部をのぞいて高い評価をうけている。広津和郎・藤森成吉・正宗白鳥・近松秋江・川端康成・杉山平助・浅原六朗・青野季吉・牧野信一・武林無想庵など、それに早稲田派などからは、肯定的な評価があり、なかでも『あにいもうと』などは大きい反響をよび、犀星文学ははなばなしい復活をとげるのである。（「室生犀星全集」月報『犀星評の変遷』奥野健男　新潮社）

ところが、犀星文学はその後まもなく、昭和一二年ごろから沈滞をみせはじめる。そして、一五年（五一歳）一一月『萩吹く歌』を発表、以後「王朝もの」といわれるものに転移し、やがて枯淡の世界へと沈潜をつづけ、忘れられた作家として、戦後をむかえるのである。しかし犀星は再度の文学的昂揚の様相をみせはじめる。戦後派のはなばなしい進出がひととおりしずまった昭和三〇年一月（六六歳）、随筆『女ひと』によって見事な復活をなしとげるのである。そして、昭和三一年一一月から三二年八月にかけての、犀星文学大成の中軸作品ともいうべき『杏つ子』ついで三二年の『かげろふの日記遺文』が、老いの活力をみなぎらせて、一流作家としての確乎たる座を与えられるべく世にむかえられる。

作家として登場した大正期はともかくとして、昭和の戦前、戦後を通じて、それぞれの活動期に、量的、質的に高い評価をうけているにかかわらず、小説面での犀星文学については、どういう理由からか、他の作家にくらべて、評論や研究の対象としてとりあげられることがまことにすくないのである。幾種類かの現代日本文学全集などには、一流作家と同列のとりあつかいをうけながら、犀暦文学についての作家論、作品論または研究論考ということになると、まことに寥々たる実情はどういうことであろうか。犀星逝いて一〇年、彼に関する単行本の著作は、新保千代子氏の『室生犀星―ききがき抄』（昭和三七年一二月）中野重治氏の『室生犀星』（昭和四三年一〇月・筑摩叢書）清水書院のセンチュリ

ー・ブックス「人と作品」の一冊である本多浩氏の『室生犀星』（新書版の概説書）があるだけである。

作家論・作品論としては、奥野健男氏の「文学界」連載（昭和三五年五・六月）の『室生犀星』が、まっこうからとりくんだ唯一のもので、他は大分古くなるが、中村光夫氏・伊藤信吉氏のものなどその他二、三があるにすぎないのである。ことに最も異色のある「市井鬼もの」時代については、『あにいもうと』がある程度とりあげられるだけで、ふしぎなほど見当らないのである。

そこで、まずそのようになにか敬遠され気味であるということそのことに、「市井鬼もの」の特異性をすくいあげる端緒をとらえなければならない。

「市井鬼もの」全体を通じて、常識的にいえることは、すくなくとも表面的に思想性をもたないということである。近代小説について、かならず型どおりにとりあげられる、自我とか、罪の意識とか、生の挫折・不安・絶望または虚無とかいうものを、犀星は深刻なものとして自分の文学にとりいれないのである。そこに描かれる人間は、ほとんどちまたの世界に黄色いいきを吐きながらきりきりと生きていかねばならない人間であり、そのために自分の心を悠長に深刻ぶってのぞきこむといういとまをもたない人間である。すさまじく現実的であり生活的であり、野性的でさえある庶民のなかの庶民である。不安や懐疑はあっても、それはすくなくとも内面的なあるいは観念的なものではなく、実生活的・対外的なものである。『チンドン世界』『猟人』『悪い魂』『会社の図』『女の図』などに、特にいきいきとした活力をもってすさまじくあらわれる人間は、そのように思想を拒否するかのようであるがために、そして裏をかえせばその楽天的な野性のゆえに、一面心情的なあわれささえひそませているごとくでもある。犀星自身『詩よ君とお別れする』（昭和九年八月）と、抒情との袂別をしながら、その環境と資性とによってつちかわれた特異な抒情性が、あらわなものとしてはむしろ虚構的な反抒情性のかたちを、犀星的意匠にまで明確に造型しながらも、ふかいところで「生」の燃焼の陰影をきざみつけているのである。

昭和一〇年六月の「改造」に、犀星は小説論風の随想『復讐の文学』をのせている。「市井鬼もの」時代の小説制作の熱気をおびた心意がうかがえるのである。

ただ良き忠実な作品を書くために生きているのは、もはや惨めな限りである。どれだけの熱意と技法の限りを尽してもそれはただの小説であり、好く書いてあるに過ぎないからである。それらの外側にはみ出した正義や懲戒や討伐、或ひは戦ひすら正義につくより外にはない。（中略）我々のあさる人生にも休まずに精悍な武器をとり、仮借なく最つとあばくものをあばき最後の一人をも残さずに、それの人生を裁かねばならないのである。（傍点筆者）

犀星はここで、復讐しなければならないといいながら、なにに対してどのようにする復讐であるのか、いっこうにはっきりしない彼一流の非合理の言い方で、これを意味づけようとする論者の筆をにぶらせるにすぎない。しかし、これは「市井鬼もの」を解明する場合に、まずその心意の様相をたしかめる強力なよすがと

しなければならないものであることは否定できないのである。そして、広津和郎が、『犀星の暫定的リアリズム』（昭和一〇年七月）で「『復讐』という言葉の正確な意味を、彼のあの文章から掴み取る事は困難であるが、併し彼が『復讐』という言葉で表現せずにいられない気持が、彼の胸にむんむんと渦巻き沸り立っている事は十分感ずることができる。（中略）それ等の切り込む、復讐するは、犀星の作家的心理現象としては、そういう言葉を用いなければいられない、或迫った気持に達しているらしい事は解るが……」とのべていること以上に、それに思弁的な意味づけをすることは困難である。しかし、なお印象的な言いかたがゆるされるならば、その「或迫った気持」に触発させるものとして、現実社会のいわれなき仕打ちに、自意識をもって対決し反逆するということではなく、より野性的であり庶民的共同的である生の意志を基盤にした、それゆえに生をつらぬくことに倫理的な情念ともいうべきものが、活力をみなぎらせて行く手の怪物にたちむかう様相をみせてせりあがってくるのである。そういうものに裏打ちされた気迫が、当時佐藤春夫をして悪文の最たるものと揚言させた異様な文体によって、見事な犀星的世界をいみじくもつくりあげているのである。

ともあれ、「市井鬼もの」は、従来の近代文学の本流とされるもの―鷗外・漱石・藤村・直哉など―にみることのなかった特異性においていろいろの問題をもっている。それが、評論や研究の対象として異常に手びかえされることになり、それをもし無理おしをしたり、例によって自我や不安や懐疑や虚無やデカダンスやといった、品のよい色あいをひととおりならべたてて体裁をととのえることにおわるだけでは、かえってあらぬ方への手さぐりになったり、大事なものがはみだしてしまうおそれがある。彼は、昭和三七年一月、死の直前にあって、『われはうたえどやぶれかぶれ』の中篇を発表した。まこと、ある意味では犀星の文学は、やぶれかぶれのうつくしい歌であるともいえるのではないだろうか。

今後の犀星論に期待したいのである。